

平城宮跡第99次発掘調査現地説明資料

1976年11月27日

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

調査期間：1976年10月4日～12月末日

調査地域：平城宮東院地区東南隅の園池と東面大垣 面積：2,800 m²

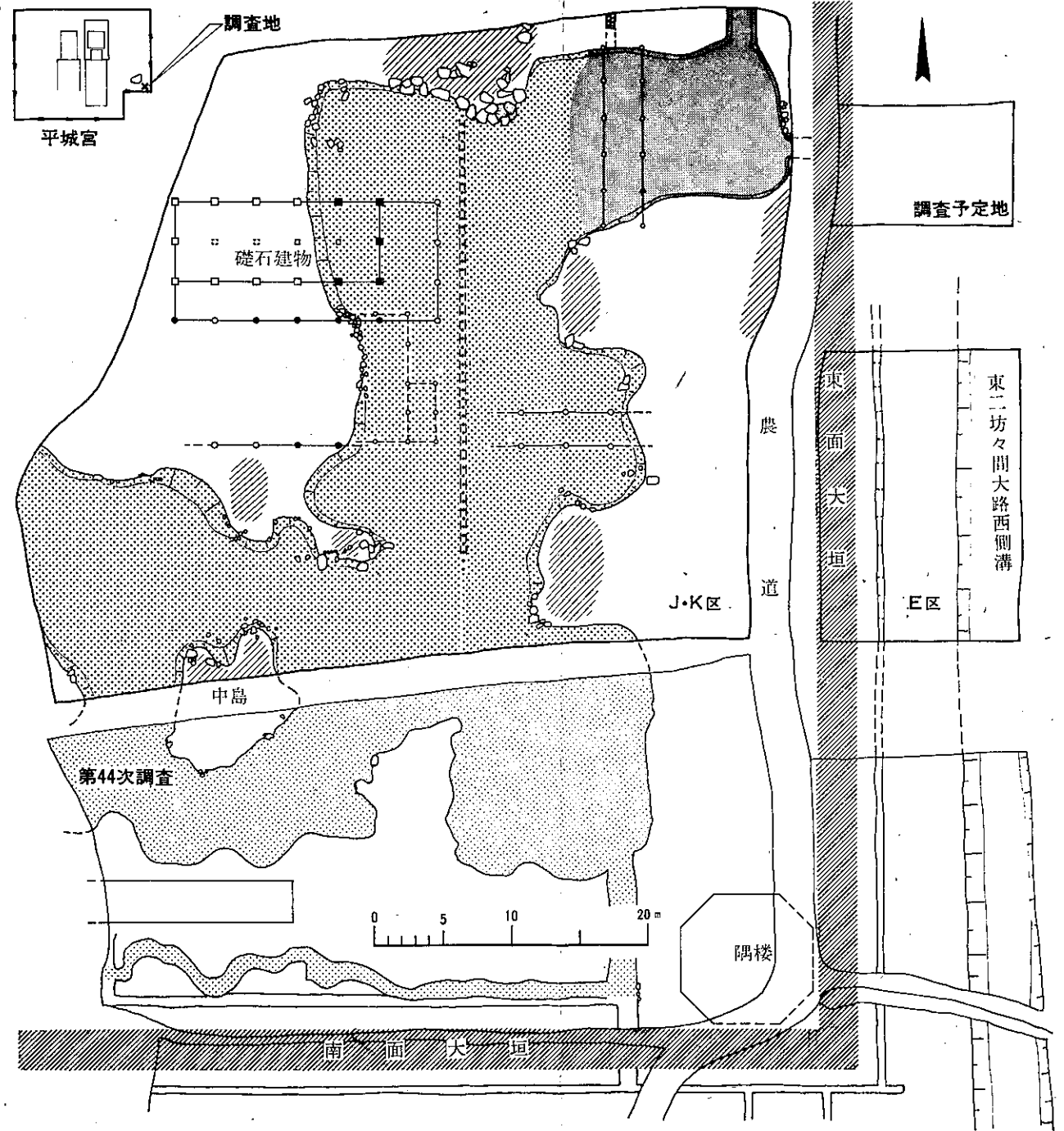
調査目的：1967年度に行った東院地区東南隅の調査(第44次)で検出された園池の北方部部分と東方の東面大垣を明らかにし、東院地区の性格および宮内園池の実態を究明する。

検出遺構：J・K区では園池1、建物1、橋1、棧敷様架設物1、溝3を検出。園池は新旧2時期の遺構が重複し、上層の新池は南北60m、東西50mの範囲に複雑に曲折した汀線をもってひろがる。岬・中島には片麻岩、花崗石などの大石を築き石山とし、洲浜や池底に玉石を敷きつめている。建物は6間(約19m)×3間(約8.5m)の東西棟建物で、南・東二面を廂とする。廂側柱は断面八角形の掘立柱で、付近からこれにともなう根巻石が発見されている。橋は南北5間(長さ14.0m、幅2.8m)であり、北東部分を縦断している。

H・E区では東西築地大垣(推定幅約3m)、東側雨落溝(幅約50cm)、東二坊々間路西側溝(幅約5m)、暗渠1、木塀1などを検出した。なお、大垣をめぐる犬走りの幅は8.5m。

出土遺物：新池の堆積土から多量の遺物が出土した。土器には緑釉・灰釉陶器・土師器・須恵器などがあり、いずれも平安時代初期に属する。また「蔵人所」「酒坏」「宮」などの墨書土器もあった。瓦埴類には水波文埴、緑釉埴、鬼瓦、軒瓦などがある。木器としては曲物、挽物蓋、箸、砵などのほか、建築模型にともなう斗形の出土が注目される。金属器としては和同開珎や金具類がある。木簡は新池から8点(1～8)、坊間路西側溝から3点(9～11)出土した。1 春米と記す習書、2 「第十五横」、3 「貞雄方一丈」、4 「忠安方一丈」、5 「宗麻呂方一丈」、6 「(伯耆国)河村郡河村郷白米五斗」、7 「□合」、8 習書、9 「所所□□」、10 「余長布廿六端 □□廿□絢余糸四絢」、11 「□罪頓首左兵衛□」。

成果 1 園池は法華寺付近からのびる丘陵先端の低湿地に位置する。2 新旧2期にわたって構築され、新池は奈良時代後半に形成され、平安時代初期に廃絶した。(旧池の調査は今後続行する) 3 新池は大垣に沿って大きくL字形に屈曲し、汀線は複雑に出入する。北岸の礎石建物は池中に張りだし、この東北方に大きな築山、東南方に八角の隅楼、南方に東西棟建物を望む。今回の調査で池のほぼ全域を検出したことになり、北東方の橋が北岸と南岸とを結ぶ。導水路は北東にあり、宮外の坊間路側溝に結びついている可能性が大きい。



平城宮第99次調査遺構略図(1976年11月現在)